特集・国際化時代の市民と行政❺

市民の意見と活動

①山手の丘から
②ホーム・ステイ活動
③横浜JCの国際交流活動
④国際親善と慈善活動
⑤市民運動としての難民救援活動
⑥横浜市民の国際交流活動

①山手の丘から 私のヨコハマと横浜

GEORGE OKUHARA

私はセント・ジョセフで一五年間教師生活をしています。その前の生徒時代を入れると、二五年以上、山手の丘に通ったことになります。山手の丘がその間どの様に変わったかもよく見てきました。

山手というのは、西欧列強租界時代の幕末から今日まで外国人を中心に発展してきました。その山手の歴史は、まさしく横浜の発展を代弁しています。

横浜の発展が三つの時代分けになっているように、山手も震災前、戦前、戦後と大きく分けることができます。震災前は、今日の六本木のように外国人にとって横浜を中心に生活・企業活動が行われていました。震災で大きな打撃を受けたものの、一九三〇年にはほぼその前の形に復興しました。そして太平洋戦争で外国人排斥を受けて、横浜は第二の試練に直面しました。戦後、進駐軍と共に横浜は元の居留地時代を思わせるような時代を迎えました。日本人はそのような時代では主役ではなく、常に脇役でありました。今日、外国人が主役であった時代は去り、日本人が主役である国際交流の時代を迎えています。黒船以来、常に受け身であった国際交流に前向きに取り組む時代が来ていると思います。

セント・ジョセフ・カレッジは一八八八年、東京の居留地であった築地にマリア会修道士が暁星学園として、外国人子弟に教育を始めた時に端を発します。その後、学校が九段に移り、ほとんどの生徒が横浜から寮生として通いました。おもしろいエピソードは、それらの外国人生徒が日本語を校内で話したら、罰とし

て週末に横浜へ帰さなかったことです。今日でもセント（横浜の人達はセント・ジョセフのことをこの愛称で呼ぶ）で百年間、その伝統は守られています。戦前までは、フランス語と英語の二カ国語で教育を行ってきました。それはまさしくフランスの力と関係しています。

一九〇一年、横浜に移ったのも、外国人が東京ではなく、主に横浜に居住し、横浜に将来性があったからだと考えられます。

その頃の横浜は、日本の先進都市であり、今日の筑波学園都市と丸の内、成田、六本木を一緒にしたような都市だったようです。

ゲーテー座には、日本の有名文学者達がいち早く先進文化にふれようと東京からやって来ました。[注(1)] YCACが日本の人達に野球、ラグビー、テニスや他のスポーツを紹介しました。近代的本屋も横浜から、クリーニング、アイスクリームや数えきれない近代的西洋文化や西洋製品が横浜から東京、横浜から全国へ広まりました。当然、国際交流に関しても、ほっておいても日本人の方から熱心に横浜に集まり取り入れようとしました。

セント・ジョセフもそのような時代に黄金期を迎え、発展してきました。多くの人材を世に送り出しました。元町の人達、外国貿易に携わっている人達に多く卒業生がいます。今日でも日本語が堪能な外国人の中にはセントの出身者が多いようです。E・H・エリック氏、英語教育者のハリス氏もその一人です。

山手の丘には多くのミッション系の女学校があります。それらの多くが、時代と共に英語主体の学校から日本人子弟の為の学校へと変っていった中で、セントだけは頑固に外国人の為の学校として変わらなかったのです。それは、首尾一貫して外国人コミュニティーの為に教育を行ってきたからです。

山手の変貌を見てきた私には、山手が外国人だけのものから日本人のものに移っていったのが肌で感じられます。それは山手病院が単なるクリニックとなり、セント・ジョセフから港の見える丘公園までの間でも（エイマールさんを除けば）外国人が一人も居なくなったことでもそれは語れます。そのエイマールさんでも三代目です。そこには、今、多くの横浜在住外国人が直面している日本人化の問題がおきています。それは日本人と結婚していくなかで日本に同化していくことです。三代目や四代目では、彼らの中には本国（フランスやイギリス）に一度も行ったことがない人もいます。せめてそれらの人たちに出来ることは、セント・ジョセフに行き、語学や国際教育をとおして日本の中の外国人として生きるアイデンティティーを体得することであると思います。

〝横浜の外国人〟とは船が貿易の手段であった時の人たちです。それは、二、三年しかいない最近の短期滞在の外国人とは、どこかひとあじちがう感じがします。彼らは骨をうずめる覚悟で日本へ来たわけですし、その当時の日本は発展途上国でした。横浜に残った外国人の間には、ラフカディオ・ハーンのような外国人が多くみられます。これらの人々が山手教会をつくりました。[注(2)] グラウェルト博士やエイマル商会のエイマル氏、デンティチ商会のデンティチ氏、バルコム商会（今日の日本BMW前身）のフェルナンデス氏、横浜では有名であったヘルム・ブラザースのヘルム氏や他の多くの外国人の親が横浜に震災前に来て財を築いたのです。その人たちの子供は山手病院で生れ、セント・ジョセフ・カレッジに通い、外国人商館で貿易を営み、YCACでスポーツをし、ゲーテー座で劇を行い、やがて老いて山手病院で亡くなり、外国人墓地に葬られるというのが典型的なパターンでした。

私は、今年、その名誉ある外国人墓地管理委員会の理事・事務局長になりました。つまり、先に述べたパターンの一つの重要な地位に就いたのです。それだからというのではないが、今日の国際交流を考えるとき横浜の歴史を語らずに国際交流を語れないと思います。

外国人墓地も、セント・ジョセフ

も、YCACも、みな同じ問題をかかえています。それは、横浜の今日的国際性の問題でもあります。

今日来る外国人はほとんど、飛行場で飛行機を乗り継ぐ客のような者で、外国人関係者の間では、それらの人たちをトランジェント[注(4)]とよんでいます。この前、YCAC墓地管理委員総会があった時、YCACのマネージャーが、「外人墓地も財政的にたいへんでしょう」といわれた。それは、YCACの会員を見ても、ほとんどがトランジェントの人たちで、その中のやっと一〇名ぐらいが将来墓地にお世話になる人だといっていました。

例えば横浜のフランス人会を代表する人でも、昔のエイマル氏のような人ではなく、ジャン・ピエール氏のようにフランス銀行につとめて二、三年、日本に滞在するような人が多くみられるようになりました。ではこういう人たちは、何を望んでいるのであろうか。それを考えて、国際交流をしなければならない。

古き良き横浜は、ちょうど山手が変ったように、変らなければならない。いつまでも、過去の栄光にしがみついているわけにはいかない。たしかに文化という面では、歴史は貴重であり、長い目で見れば、文化を大切にしていた町はいつまでも、続いていく。いつかは文化で食う時代がくる。それは、せめて、山手だけでも、横浜の文化の中心地に置かなければならないと私は思う。外人墓地やセント・ジョセフ・カレッジは横浜の顔だと思います。

しかるに、この変貌する今日の国際社会の中で、前進的かつ効果的な国際交流を考えるとき、まず、横浜が外国人にとって魅力ある町でなければならない。

それは、簡単である。歴史をふりかえって見て、なぜ幕末から明治にかけて、大勢の外国人が横浜に来たかを考えれば、おのずから答がでます。まず、第一に港です。今は、船の時代ではなく、空港の時代です。ロータリアンの加藤氏[注(4)]がいわれている金沢沖の空港を造ることです。第二に、次の産業時代の先駆者になることです。それは情報・金融を中心とした第三次産業を横浜にもってくることです。第三に、学校・文化の中心であるべきです。例えば国際関係の大学で留学生や世界的規模の学校を育成すべきで、文化でも、先進的なものを導入すべきです。原宿や六本木に負けない新しいものであるべきです。今は、眉をしかめるものかもしれないが、つねに新しいものを取り入れるという先進性が大切です。

多くの外国人は或る意味で出稼者であり、流動的です。そんなわけで、今日では、数多くの外国人が、横浜ではなく東京で働き東京に住んでいます。セント・ジョセフ時代の多くの友人は、アメリカの企業から日本に派遣されているが、ほとんどの場合、東京の麻布に住んでいます。そして南青山から世田ケ谷にかけて、昔の横浜で見られた外国人居留地のような風景が見られる。それはなぜかというと、ビジネスが東京にあるからです。

同じように、セント・ジョセフのような学校が東京にどんどん建っていく。外国人専用のアパートも然り。アメリカン・クラブも社交場として昼夜にぎわっている。どうしてなのかといつも疑問に思っていたが、それは、発展していく産業が東京に集っているからです。

長い間横浜に、外国人たちが築いてきたものは、まず、インターナショナル・スクール。次に、YCACのようなスポーツ施設。三つ目には、山手病院のような医療施設。四つ目には、外国人墓地です。それらがあるので、横浜には異国情緒あふれる町として、今日でも大勢の観光客が訪れているのだと思います。それらを充実しないで、本当の国際文化都市として生きていくことはできない。まずその中で、外国人墓地は、横浜を代表する史蹟です。近い将来、資料館をもうけたいと思います。その時には、市や市民の協力を得て外人墓地を後世に存続させなければならないと思います。外人墓地には明治以来日本の近代化のために尽した多数の外国人が眠ってい

ます。その人たちへの恩義と、横浜の国際文化都市のシンボルとしても、維持発展させることが重要であると思います。

次にセント・ジョセフのような国際学校が、これからますます発展し、外国人子弟と日本人との東西の融合の場として活躍していくためには、法律的にも他の日本の学校と同様の扱いを受けるべきだと思います。日本人はずるいとよくいわれる。それは、文化の違いからくるものであるし、コミュニケーションや考え方の違いからくるものであると思う。その一つに、このような外国人が築いたものを、日本人の法律から除外してしまう習慣がある。外国で日本人が、日本人学校を始める時、なんら外国の学校とあつかいに差違があるわけではないのに、日本では日本人の学校と差別が行われています。外国人学校が、外国人が多く住んでいる所だけで存続していけばよいという思想に基づくなら、東京に移れということになります。それではますます横浜には外国人が住みにくくなり、国際都市の容貌は失われてしまう。横浜が国際文化都市として存続していくためにも、このような学校の認知・育成が重要であります。

「ビジネスがすべて東京で行われ、外国人が住むには東京でなければならない。今日では、横浜は外国人墓地に葬むられる時だけに存在する町になってしまったのではなかろうか」とある外国人商社マンが言っていた。それでは、外国人にとって何の魅力もない町です。

では、どうすればいいのか。それには、現在でも、頑固に長い風雪に耐えてきたセント・ジョセフや外国人墓地をあたたかく援助し、その上で、新しいプロジェクトを手がけていくという形が一番よいのではなかろうかと私は思う。

今となったら、もうやりなおすことができないが、山手病院も総合病院として、聖路加病院のように日本人にも開放しながら、外国人のための特別病室をもつ形になるべきであったと思う。

これからの国際文化都市は、西洋だけではなく、東洋（中国、東南アジア）にも目をむけていかなければならない。東洋人や西洋人が融合して学び、働らき生活していく町でなければならない。

「みなとみらい21」事業は新しい横浜の発展のために大きな役割をはたすと思う。この事業が予定通りに実現した場合には、東京から外国人が帰ってきます。その時には、昔の活気がもどってくるはずです。

横浜は、今も昔も、アッパー・ミドルクラスのための町であると思う。それが外国人であろうが、日本人であろうが、横浜に住んでいる人たちの大多数は、そのような人たちでなりたっています。

その人たちがどのようなことを市に期待しているかといえば、緑あふれる木々と、美しい海岸線に恵まれた町です。そのためにも、長期的計画の中で、例えば、本牧・根岸の石油コンビナートを沖合から千葉にでも移すことが望まれます。二十年前まであった数多くの本牧の外国人ハウスがほとんど消えてしまった。それは、あのグロテスクな風景より、麻布や代官山の緑あふれる木々に囲まれた方がよいと思い、移ってしまったと思われます。そして、三渓園から見える煙突は横浜の文化遺産に対する無知を内外に示しています。ぜひとも早急に、せめて煙突だけでも三渓園から見えることのないように要望します。そして、十年、二十年後には三渓園にビーチを取り戻すようにすべきだと思う。その時に、文化の時代を迎えるであろう日本にとって、一番の遺産を残すことになると思う。

山手と本牧のビーチ、それらは明治から外国人が中心となって築いてきたもので、これからは日本人が中心になってその意向をうけついでいかなければならないと私は思う。

＜セント・ジョセフ・インターナショナルスクール＞

(1) テニスコート、プール、サッカー場などの会員制のクラブ。現在地―横浜市中区矢口台一一。YCAC = Yokohama Country & Athletic Club.

(2) Grauert, Harmann Luduing 一八三七年オランダ生れ。安政四年（一八五七年）来日。翌年、横浜に来て貿易業グラウェルト商会を設立、国際文化交流に尽力。一九〇一年十一月一日、横浜で逝去。

(3) Transient（短期滞在者）

(4) ロータリークラブ（国際親善と社会奉仕をモットーとする実業家・知識人の国際的社交団体―一九五〇年、米国シカゴ市で Rotary International が創設された）の会員、アポロ石油社長加藤進治氏

参考

昭和五十九年八月、横浜の経済人で組織する「横浜海上空港研究会」（代表、加藤進治・横浜商工会議所企画特別委員会副委員長）が、横浜市の金沢沖一五〇〇ヘクタールを埋め立てて本牧と結ぶ「国際空港建設構想」を発表。

②ホームステイ活動

我が家の国際交流

佐藤敦子

一――はじめに
二――YFUとは
三――娘の留学
四――受け入れの問題点
五――我が家のホームステイ活動
六――おわりに

一――はじめに

友人は私を国際人という。

海外に一度も行ったこともなく、英会話も中学生程度で、不勉強でたいして進歩もしていないのに、我が家にはここ六年間、毎年外国人が家族として一緒に住んでいる。

アメリカに四人、オーストラリアに一人、香港に一人、中国に二人、フィリピンに一人、私を「お母さん」と呼んでくれる息子や娘がいる。台湾、タイ、ビルマ、マレーシア、ブルネイ…の娘の友達も新たに加わって、国際色豊かである。

平均的日本人として暮らしていた我が家が、賑やかな国際家族（?）となったのは、娘のアメリカ留学をきっかけとしてであった。それも偶然のチャンスで。

娘が中学生になった頃、この子には国際人になって欲しいと願った。

まず英語が話せるようにしたい―そのためには外人と話す機会を持てばよい。そこまで考えたものの、さてその後どうしたらいいか分からない。

知人が英語の先生としてテレビに出ていたのを思い出し、電話をしてみた。

「外人の子供と遊ばせれば良いだろうが、日本にいる外人には限りがある、そんな機会をつかむのは難しい。」と言うつれない答え。

それから四年後、街で偶然大学時代の後輩に出会った。久し振りで積もる話を